第四番 宿組

大正４年制作の那古地区唯一の屋台です。お囃子は江戸囃子の「屋台・四丁目」「ぴっとこ」を奏でます。彫刻は鬼板が珠取龍、前柱が龍、後柱は唐獅子、欄間は花鳥や素戔嗚尊と八岐大蛇、天岩戸の天照大神などの神話、高欄の八面には郭巨、楊香、孟宗他、二十四考です。一番の見所は、境内入口で行う「鎌倉」のお囃子に乗せた白狐舞い。

第五番 東藤組

現在の山車は昭和11年に製造された六台目。彫刻は後藤義徳によるもので、豊臣秀吉の幼少期から太閤になるまでの出世物語を表しており、大幕は秀吉ゆかりの加藤清正が虎退治する様を表している。人形は太閤秀吉と馬印の千成瓢箪。扁額は正面に「豊國」。囃子台の内には「協力一致」が彫られている。

第六番 芝崎組

明治30年以前の山車とされ、平成31年に大修繕を施しました。大幕は京都で新調し、唐獅子に牡丹の刺繍です。彫刻は、大きく羽を広げた鳳凰が梁に留り、前柱は相生の松に鶴、高砂の尉と姥が刻まれ、長寿を表す吉祥の彫刻となっています。さらに、初代後藤義光作の表情豊かな金剛力士が四隅に座ります。

年番 寺赤組

明治32年制作。扁額の「建む中興」が示すとおり、山車全体で「太平記」の物語を表現しています。人形は「後醍醐天皇」、大幕は楠木正成が辞世の句を残す名場面を江戸後期の伝統的な技法で刺繍し、立体感や遠近感が感じられます。彫刻は後藤義光の晩年の最高傑作と言っても過言ではない出来栄えです。2003年館山市指定有形文化財に指定されています。

第貳番 濱組

建造は明治43年、彫刻は後藤喜三郎橘義信作で、鯉の滝登り、芸州厳島の全景、七福神など。人形は弁財天。胴幕は登り竜、下り竜。房州一の大太鼓、固定式梶棒が自慢。濱町内の厳島神社にちなんだ彫刻、人形が特徴。

第三番 大芝組

明治30年以前の造立の山車といわれ、那古地区の中では一番古く、館山市内でも古式で、梶は丸太棒の一本舵を継承しています。人形は三種の神器を持つ「神武天皇」、彫刻は松の木に群れる小鳥を狙う鷹の丸彫りで彫刻師は後藤喜三郎橘義信作、大幕は右面が松に鶴、左面が雲に鶴。

那古観音祭礼 見どころルートマップ

発行：那古祭礼興隆会

那古観音祭礼

「なごのまつり」は補陀洛山那古寺の本尊千手観世音菩薩の縁日に実施されてきたことから正式に「那古観音祭礼」と呼ばれている。

那古寺は養老元年（717年）に僧行基が千手観世音菩薩を敬刻安置したことに始まると伝えられ1309年の歴史がある。その間、源頼朝をはじめ関東公方足利氏、里見氏、徳川氏ら武家の信仰も篤く寺勢は大いに栄えた。また鎌倉時代に創設された坂東観音霊場の結願札所として、江戸時代中期より今日まで全国各地から参詣者の絶えない名刹である。

祭礼の起源は定かではないが、江戸時代まで鶴谷八幡宮の別当寺として、仏教行事の「放生会」という祭礼を行うにあたり花車を曳いて八幡宮に参拝したとの口承がある。明治期に神仏分離令が発令されてからは八幡宮との祭礼交流がなくなり各町内で独自に祭礼を執り行っていたが、明治30年の観音縁日にあわせ、1年交代の年番町内が祭礼を仕切る規約を定めて発足し、以来129年の由緒ある祭礼となっている。

那古観音祭礼は7月18日を縁日として行われてきたが、令和8年度より5月18日をもって観音縁日とし、午前10時に観音堂において祭典の護摩祈祷法要を厳修、「道中安全・町内興隆」と「世界平和・人類幸福」を祈願する。

5月23日（土）宵祭には各町内を、24日（日）本祭は6町内へ、山車5台・屋台1台の曳き廻しを実施する。

本祭当日は午前11時頃に6台が那古寺本坊前境内に参集し、出発式を行う。各町内の山車屋台に護摩札が授与安置され、正午より年番を先頭に巡行が始まる。18時から22時まで観音堂下の県道では車両規制が実施され、腕自慢の太鼓打ちを中心に「笛・太鼓」のお囃子の奏演が繰り広げられると祭りムードは最高潮に達する。

年番山車より次々に那古寺本坊前へ集結し、年番渡しが行われる。

祭礼参加者は本尊千手観世音菩薩に帰依が深まり、厳粛規律を重んじて祭礼に係ることを誇りに思っている。